

## サービ斯拉ーニングを振り返って

社会福祉学部保健福祉学科 2年 和手 悠祐

活動先：NPO 法人 ぱお

クラス：野尻 紀恵 先生

一年生のゼミ選択の際、私は他のゼミを選択していた。しかし先輩から助言で、NPOの仕組みや大切さを体験でき、そして、児童分野について学習することができるという理由から、急遽、サービ斯拉ーニングを選択した。当初は、ゼミに知り合いがおらず、大変不安ではあったが、サービ斯拉ーニングという、一年生の時ではできなかった現場体験という大きな経験の場への期待が大きかったように感じ、早く体験を行いたいという意欲が強かったことを覚えている。また、自分の希望のNPOに入ることができ、児童への関心が強かった私は、さらに意欲がわいた。

NPOについての学習や、学びたいことをチームでまとめ、不安要素などを話し合いながら、自分のチームについて分かったことが二つあった。まず一つ目は、全員の目的とモチベーションの違いに気がついた。私は、期待が大きかったが、他の三人はどちらかといえば、不安や心配が大きかったように感じた。もう一つが、一人一人の適所である。例えば、高野君であれば、的確な判断や、リーダーシップをとることに長けていた。柳さんであれば、唯一の女性ということもあり、私たちでは気がつかない女性的目線からの判断や、誰よりも楽しもうとしていることが分かった。鈴木君は、誰よりも落ち着きがあり、また、誰の意見にも肯定を持って接するので、意見が出しやすくなり、討論が活発化していた。この中で、自分はどのような役割を果たすべきかと考えた。そうして自分の役割として意識していたことは、チームのムードを良くすること、そして、自分たちのペースを崩さないことであると私なりに認識していた。

こうしたことを続けながら、初の顔合わせを、私たちが体験させていただくNPO ぱおの代表者である関さんで行った。ここで決まったことは、六日間のうち五日間をツリーハウスづくりにし、最終日を私たちに任せるということだった。ここまでの決まったことから、最終日を打ち上げのための料理づくりにすることに決定した。

夏休みに入り、サービ斯拉ーニング初日。私たちは、最も重要である子どもたちと初の顔合わせを行った。初日にいた子は三人で、関さんのお子さんと、小学二年生の子が二人だった。ここから、三人が増え、私たちを含め計十人で、ツリーハウスをつくることになった。ぱおでは、ニックネームをつけて呼び合い、親しみやすくしあっていた。私たちもニックネームを子どもたちにつけてもらい、初日は、最後にツリーハウス造りの場所をみて解散であった。この時に分かったことであるが、NPO 法人ぱおは、関さん一人で運営しており、ツリーハウス造りは、地域の方の協力で、格安の値段で、提供してもらっていた。このような小規模でのNPOの場合、地域の方からの提供は、特に大切なものであり、いかに地域から必要とされているのかということが分かった。

ここから本格的なツリーハウス造りが開始された。ツリーハウスの場所は、山を少し登らなくてはならず、真夏の中の作業ということもあり、子どもたちの体調に注意しながら、けがの無いように、しっかりと目を離さないようにする必要があった。材料となる木材は、

地域の方からの提供で、のこぎりや金づちは、みんなで持ち合わせることに決定しており、木材加工班と、土台づくり班に分かれることになった。注意しなければいけないことは、刃物を使うときは、必ず私たちが見ていて、土台を運ぶ時やつくるときは、なるべくなぜそのようにするのかということ、説明することである。その理由としては、安全のためはもちろん、協力という意味や、この木材がどうなるかということ、説明することで、完成への意識を高めようとしたからである。こうしていくことで、地道ながらも進んでいったが、蜂の巣があるという問題から、急遽場所が変更となった。急なこともあり、子どもたちのモチベーションが心配されたが、それほどでもなかった。

こうして作業を重ねていくうえで、三、四日目から、私は、子どもたちに団結力が生まれているように感じた。初日では挨拶もしなかった子が、少し照れながらも、ありがとうという言葉を自ら言ったときに、協力して何かを行うということは、これだけの意味があるのではないかと感じ、さらに、今後の彼らの成長が楽しみになった。

スローペースだったため、六日目までもつれ込むことになったが、幸いツリーハウスは見事完成し、最終日は、予定していたカレー作りとチヂミ作りを行った。この時に使用した鶏肉は、地域の方からの提供で、生きたニワトリをその場で殺し、そして、その場で捌いたものだった。たった今まで生きていた動物を殺し、食すということは、どれだけ残酷で、私たちが普段口にしているものは、どれだけ感謝を持って食べるものであるかということ、をしっかりと自覚する体験であった。こうして、六日間が終了した。最後に、「助かったわ」と子どもに言われた時は、彼らなりの精いっぱい感謝の気持ちであると伝わり、達成感が生まれた。

九月に入り、この六日間を振り返るために最も重要なリフレクションシートを受け取った時、自分のしてきた間違いが明らかとなった。それは、心配のしすぎと空回りであった。私は、事あるごとに、危険、心配、という言葉、を口に、子どもたちの成長の場をつぶしていたということに気がついた。また、場を和ませるということを目指していたが、そこには私以外に誰ができるという慢心があった。しかし、実際は、そんなこともなく、逆に空気を悪くしている時があることが分かった。自分に対して立ち止まって考えることを怠った自分のミスがわかり、ここからの具体的目標がわかり、欠点を克服していこうと感じた。

私は将来的に児童分野を希望している。今後は、サービスラーニングを通して発覚した、私が克服しなければいけない欠点を意識しながらこのサービスラーニングで学んだ、経験、そして地域と連携の大切さを頭に入れ、将来に生かそうと感じた。